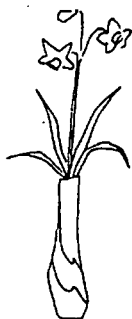


教育を父母・国民の手に

— 豊かな子どもを育てる私たちの実践を大きな流れに —



高 橋 武 昌

一、しょうゆだんこの話から

私が赴任した南中野山小学校は、新潟住宅地で新潟市のベットタウンでもあります。児童数八七〇、私は一年二組で四十二名を持っています。学級の子は、十四の保育園から集まってきたいますが、どの子も転勤で来た子、その地につり住んで十年以内という子、新潟市が主だが全国各地の子が混っている生育基盤のちがう子たちです。

体を駆使して遊べない子や友だち同志いっしょにものごとにとりくむことがへたな子たちが目立った四月でした。丸山小学校の一年生で見ることの出来ない大へんな子たちだったのです。

入学して、ようやく一か月たとうとする四月二十八日に

「さあ、あすから二日間おやすみです。思いっきり外であそぶことと、学級のおともだちや近所のおともだちと遊ぶことがしゃくだいです。」といいました。

だいがくんとしんすけくん、ならんですわっています。その、しんすけ君の五月一日の絵日記に「きのうしょうゆだんごお たべたから いからしだいがくくんお たべたくなりました」とありました。となりあわせになった二人がよく、「だいがくくん」とかいいいあっていた親しいことが、絵日記に出てきたことと、私が出した宿題は、充分実行できなかつたけど、だいがくんのことを考えた——即ち、だんごを食いながら、だいがくんを思いだし、たべたくなたとユーモアたっぷりに綴ったことを私は、すぐくほえましいと思ったのです。さっそく、次の日、スーパから

「しゅうゆだんご」を買っていき、朝の会ではなしを始めました。「しんちゃん前においで。今日はね、先生は、きみの絵日記、すばらしいから、このしゅうゆだんごあげることにした。」といってかばんからしゅうゆだんごのパックをとりだすと教室は騒然としました。「先生よくにちょうだい。」「なんでしんちゃんばっかりたべるの。」

「いいなあ。」「先生くれる。くいたーい。」大合唱です。しんちゃんは、私のいうままに、一本たべる。みんな「あーあー」と声をあげます。「しんちゃん、おいしかった? どうして、しんちゃんがね、しゅうゆだんごをたべられるかというね、ほら、この絵日記、よんでごらん。しんちゃんね、しゅうゆだんごを食べながらも、友だちのことを考えられたんぞ。しゅうゆだんごをたべていたら、だいくんをたべたくなったんだって。友達のこといつでも考えられる子なんて、すばらしいなあ。今日のしゅうゆだんごは、そのごほうびです。」

「先生、ぼくも、友だちのことを考えるからだんごちょうだい。」とみんなは、いいました。四日から入学以来はじめての家庭訪問。どこの家でも、しゅうゆだんごの一枚文集でもちきりです。

◎先生の考え、気にいった。私のうちでもしゅうゆだんごを買って与えましたよ。

◎私のうちは、きのうは、しゅうゆだんごのかわりにケー



キにしました。

◎絵日記の中のだいくんの文で、「だいくんをたべたくなりました」というところとても、子ぞもらしくほえましいですね。

今、子どもたちに、なぜいっしょに勉強するのか、いっしょに助けあったり討論しあったりするのかわ、一年生なりに全く具体的に分からせることが大切だと思うのです。しゅうゆだんごの実践は、伸介君のある日の日記をほめる仕事にとどまらず、これから、何がなんでも、父母と手をつなぎ、子どもを共に育てる基盤づくりに役立ったと思っ

ています。

新設校で、転勤の多い、いろいろな地域から寄りあつまってくる学区と先に書いたけれど、バラバラな子たちも、時間をおうごとに、自らを解きはなち、生き生きと学校生活をおくっていききました。

二、だいくんのか転校

だいくん、家の都合で郊外に引っ越すことになりました。子どもたちは、しょうゆだんごをみんなで食べてお別れ会をしようということになりました。

「だいくんと さようならのあくしゅをしたら、手がとても あたたかくなりました。だいくんとわかれたくないけど、しかたない。わかれるのが とっても さびしいです。」（まさひろ）

「きょう、だいくんが いなくなるので、わたしはさびしい。こうかを うたっているとき なみだが ずつとでてきて おちました。はずかしかったので「目にゴミがはいった」といいました。いたずらしていただいだいくんだけど、いなくなれば さびしいです。わたしは、あまり、だいくんが、すきじゃなかったです。でも、きょうあく手をしたとき やっぱり ともだちだと おもいました。だいくんは、やさしいです。おりがみ一まいだけど、ゆ

るしてくれました。わたしは、わるいなあとおもいました。わたしは やっぱり だいくんのことを わすれません。」（もとえ）

「だいくんは、いろいろやったね。すかーとめくりやけんかもしたね。そして、ともだちも いっぱいつくって いた。だいくん、ひっこしきびしいことだね。わたしも、とやまから にいがたに くるのが つらかった。でもだいくんは、そんなに とおくなくていいね。」（なお子）
二しゅうかん前からとりくんだ お別れ会は、楽しくやりました。うた・プレゼント・おわかれのあいさつ・だんごをたべる・体ごとあそぶゲームたいかい……と。子どもたちは一年生なりに分担し ほんとうによく協力しあいました。お別れ会でなきだした子もいました。しょうゆだんご三十人分でありなく残りをもなかにしたら、「先生、しょうゆだんごたべながら友だちのことを考える子はいいい子だといったのに、もなかじやいやだ。」なんて だだをこねられました。この日のことを一校文集のあとがきに次のように書きました。

「だいくんのてんこう だいくんはその木小学校に十一月二日に てんこうしました。ともだちとけんかしたり、いっしょにべんきょうしたりあそんだりしました。みなみの 子どもは ひっこしのけいけんが おおいと

おもいます。ひっこしは とても ゆめの あることかも知れません。

がんばって つくった あたらしいうちにはいれるからうれしい。おとうさんの はたらく、かいしゃが かわって みんながうつるので、たいへんだ。

でも、いやなことも おおいですね。したい人やともだちと わかれなければなりません。子どもにとっては、すきなあそびばや むしのいるあなや ひみつのきちからも さよならしなくてはなりません。

だいごくんとの 七か月の せいかつのたからものはなんだったでしょう。それは、やはり、しんすけくんのはなしのように いからし だんごが たべたくなったというはなしのように、ともだちのことをいっしょうけんめいに 考えたことではないでしょうか。そうですね、ともだちが、わたしたちの せいかつのなかで、どんなにすばらしいかを まなんだことではないでしょうか。

ですから、だいごくんも あたらしい がっこうでともだちの ことを まじめなきもちで かんがえて いきていけるものと しんじています」

お別れ会の一連の実践を親は、子どもを通して、一枚文集を通して 大変関心を示しました。毎日のように、子どもの連絡帳、お手紙を通して、母親の話がつづられていました。

その中で、何といっても、「教師が、転勤という、生活の中でとっても大きな出来ごとを、お別れ会などを通して、子どもと学びあっている姿がいい。」とか「親として、転勤という事実が大変なことを改めて考えさせられた。」とかありました。私は、毎年一割近い子の転勤があるこの学の教育の課題に、人間が出合う、人間がわかれるという事実を柱として入れることが、地域に根ざし父母に根ざす教育のひとつとも思っているのです。この課題を、私のかかわる全ての教育活動の場で追求しようとする、今までみえなかった子ども、今まで考えられなかった実践がどんどん生みだされてくるのです。

三、子どもの生きる力とそれを支えるもの

一年二学期後半から、どうも、学級の中の弱い子、あまりしゃべらない子が、元気のいい男子たちに集団でいじめられることが目立ってきました。その強い子の方の一人上原君はお父さんがエリート商社マン、お母さんは家にいます。おねえさんが一人いてとても優秀です。上原君も優秀で発言力があり、記憶力は抜群です。

ある男の子は 図工の時間私に「ブレイメンのおんがくたい」の絵で森のかき方がうまいとはめられ気をよくしています。ところが、この子は、上原君に、私のいないとこ



ろで「へたな絵だな。」「きったね色。」という言われ、元気をなくしていました。家に帰るなり学校へは行きたくないといいつづけるしまつ。弱いものをいじめていく姿は、どこでも見られる風景ですが、具体的に手をくだすことの他にそのようにことばで攻撃する姿もありました。先の子は、私に朝の会に出してはなしたいと相談されたのは一週間もいっづけられたあとのことでした。

バラバラの子どもたちは、いじめたりいじめられたりする姿で、新しい問題を私に提起してきたのです。上原君への対処・親との話しあい・学級の先生との話しあい・学級みんなとの話しあいもつづける中で、ひとつひとつ解決は

してきましたが、この分散したものの考え・生き方の子どもたちをいかに、人間的に再編成をして、創造し連帯していく集団にするかが、二年生のはじめからの最大の課題となりました。

このことを意識して、学年学級で試して来たことをメモ風にあげてみますと

- ① 子どもの実像をつかむ。彼らの頭で思ったことを綴らせるところからつかみ直す（文集をどんどんつくっていく）
- ② 子ども一人ひとりの持っている、いいところ人間的に共感できることを、いっばいとりあげ学級みんなにひろめ財産にしてい
- ③ そして、それをすぐ学級通信で親や家にひろめていく。
- ④ 学年学級行事、PTA行事のみなおし、集団でのとりくみ、どうしてもお互いがからみあわないと出来ないような行事（たとえば、地域をめぐる二年生のウォークラリーとか体ごとぶつかりあう行事とか、体ごと遊びリズムなど）
- ⑤ 生き方を問う授業の視点をつよめていく読書なども、読みきかせをふやし、おやこ読本を広めていった。
- ⑥ 一人ひとりの要求をくみとる機会と場をふやし、だまっていたり、しゃべらない子をなくする努力をしていく。
- ⑦ 学年学級こんだん会をふやしていく。

スイミング

上原しげお

ぼくは 学校のかえりに 水曜日は スイミングスクールだから わざとおそくあるきました。うちに ついたから

「ただいま。」

といいました。うちの中から

「まだ まだあうよね。」

とお母さんたちがいました。お母さんが出て来たから

ぼくは うちに入りました。

そしたら、お母さんが、

「スイミング まだまだにあうよ。」

といいました。ぼくは お母さんから かばんをもらって

二かいにいった きがえようと思いました。お母さんが

「ここできがえなさい。」

といったから ふろばできがえました。そして、きょうちゃん

の おばさんから車で石山だいのうきょうまで、のせてもらいました。ついたから 車からおりようとしたらきよ

うちゃんの おばさんが、ぼくのお母さんに、

「バスが来るまで のってなよ。」

といったからお母さんが

「いいよ、いいよ。」

といいました。そしたらきょうちゃんのおばさんが、

「いいよ、まだ のってなよ。」

といいました。また、きょうちゃんのおばさんが、

「いいよ。きょうは 大サーピスなんだから。」

といいました。そしたら お母さんが、

「でも、いいよ。」っていったから、ぼくは私の中で、

（やった）と思いました。バスが来たので、おりようとして

ら前にいたお母さんが さきにおりたから ぼくが、

「はやく、おりて。」

といいました。外にでて、バスにはいりました。

およぐのおわって外で バスを まっててもなかなか

こなくて、こおりそうになりました。いつもバスは、五時

ごろくるのに六時ごろ来ました。そして、うちでこたつに

入っていました。ぼくはスイミングスクールにいくのがい

やなのは、ぼくたちのクラスの先生がこわいし、クロール

の十メートルおよぐのも、およげないと「十一きゅうにお

とすよ。」とかいったりするからです。そして スイミン

グにいくのもぼくが 「いく。」っていったのも、もし、

ぼくが「いかない。」といったらお母さんは、

「ほんとうに いかないの。」

とか いうからです。

上原君の日記からですが、今子どものおかれている生活
中での自由と民主主義の問題を直視せざるを得ません。ま
い子どもは何一つ不自由もなければ、みたされているよ

うです。でも、決して、みたされない精神の荒廃を教師がじっくり見守っていかなくてはならないとつくづく思いいます。

なにか弱い子を見るといじめたくなる上原君の気持ち、まともなことへの反抗をしていく彼らの気持ちを、もっと深くつかんでいく必要があります。

子どもの文化を高め生活を耕やしていく家庭・子どもが充分育っていくとき最も安心できる人生の基地はどうなっているのでしょうか。

子どものことを直してほしいときちゃんと連絡帳にかいたつもりなのに、その子の弱点を家庭は暖めることでなく、その子を夫婦は一晚中追求し、暴力的にたたき次の日休んだという例もありました。この家庭の父は大きな商社の新潟支社長です。一見何一つ不安もないようで、子育ての具体的などころで、どうにもならない父母がふえています。分散したこの親も、連帯には、あともう一步なのですが……

四、あつまりつくり売りあそぶ二年生子どもまつりを

二年の四月のPTAの役員会で私は、先のような子どものバラバラな姿と親の力を今一步共に高めあいたいと熱く訴えました。

それは、地域ごとに区わけし男女混合でグループをつく遊具やアクセサリーやおかしなどいろいろつくり出して、学校で売りあう、子どもまつり、を提案したのです。七月に一日、子どもまつり、をやるために五月末からとりくむことにしたのです。反対もありましたが、子どもの現状をうれているばかりではだめということになりました。折りしも、五月十九日亀田おやこ劇場では千四百名を集めて、つくり売りあう、子どもまつり、をやりました。そのグループのつくり方、なかみ、売りがた、町のつくり方を、クラスの二十名のお母さんが、参加して、みてくれることになったのです。

話はスムーズにすすみ、クラスの親を十一のグループにわけました。日頃つきあわない家庭もいっしょになりました。あるマンションに三家族いるのに、行き来することなく一年すごして来たのです。さて、どんな店をだすか、どんな約束で売るかなど様々なことが、親店長、子ども店長によって相談され、実施にうつされました。昼間うちにいるいっしょのグループは、親同志が小物入れをつくったり粘土でつくるアクセサリーにも手をのびました。夜しか集まらないグループは、何時までも子どもの話題でなかなか仕事すすまなかったとか。又、あるグループは竹で遊具をつくることを決め、私の住んでいるとなりの地域まで、竹の支入れにきました。そして、様々な竹の遊具がいくら

れました。

子ども達に、お金の大切さを教えるためにも、売るものの価値は、二十八円とか複雑なものにしたり、現金を扱わず、子ども銀行をつくり、一円を一ピースとするニセ金に換金して使うことにしました。

当日は、子どもと親とくに父親が十名以上も来て、ゲームコーナーを開設したりして、雰囲気はもう上がりました。

「二年生子どもまつり」

松岡きょうすけ

ぼくのグループは みずほ・さちこ・ぼくの三人です。かうとき、ぼくは 金くんのみせの方によくいつて かいしました。また、たいちゃんのみせで、二十ピースで 竹でできたぞうりをかいました。それも、たいちゃんのお母さんたちが、「十ピースまであげるからかって。」といったのでしかたなくかいました。そして、じぶんのみせにかえてみたら、こんどは、みずほが、水でっぽうを一本かってきていました。

みせが おわってから、先生からきいたんだけど 百ピースしかみんなはつかっていないときいて、こんなに かけるのにびっくりしました。

さまざまな感想がよせられました。やったあとのまとめ

でわかったことですが、

①子ども同志が、よく、友だちの家へいってあそぶようになった。

②よく、大人にあってあいさつするようになった。

③大人同志も いまでも どこかのうちに集まってはおしゃべりをしている。

④あの時かったものを今でも遊具として使ったり、メダカやふなも生きている。

⑤子ども同志、おみせごっこを数人でしている。

⑥お父さんたちがつきあっている。

きりがありません。心からたのしいことや他とかかわり



あって創りだすよろこびやあとになってもそれが子どもの中に生きていることなどが、とても今大切なことではないかと思えます。子どもの現状にみんながおどろき、心配しなんとかしようとするれば、父母と手をたずさえているいろいろ実践が出来るものと思えます。そして、そのよこびは、はっきり目には見えないけれど、すこしずつ、子どもへの

親のやさしいはげましとなったり、子どもの気をゆるした授業中の発言となつてあらわれたり、私の学年・学級通信についての暖かい反応となつてあらわれ始めていることも事実です。

五、学年学級そして全校の親と共に

——中野山の文化と教育を考える会——

地域の中学校教師・おやこ劇場役員・医師・看護婦・PTA役員・主婦……と様々な人たちで「考える会」を始めちょうど半年になります。出入り自由、約束らしいものはありません。子育てのはなし・子ども文化や地域文化のはなし・規則のはなし・生き方を考える性のはなし……きりがありませんが、毎月一回学習をします。レポーターは、地域の方が主です。性教育をすすめる保健所に勤める大学の講師の方が「性教育」を語れば、地域の小中学校のPTAの講演会に必ず出ていくようになりました。二十～五十人の集会ですが、たまたまなくたのしいのです。「ああ、こんな話なら私の学校のPTAでやらなくてはそんしちゃう」「次の役員会に提案しましょう」となるわけです。

学校の一步外での教育や文化の核が、どんな学校の中、子どもの中に入っていく状況は、もういっぱいありすぎるほどあります。

今、上からの教育改革がすすめられている中で、子どもの発達の課題・学校づくりの課題の具体的なものを持ちながら父母と手をむすんでいけば、どんな教育運動だって出ていくものです。夢は大きく大きく、方法は最も具体的にすすめます。毎日学校に来たり、校外を歩き、子どもや親にあうのが、ほんとにたのしい私たちの教育運動をすすめたいものです。

(新潟市・南中野山小学校)